名のない男

TOKUMA NOVELS

傑作ハードアクション

大藪春彦

OYABU
BEST
SELECTION

TOKUMA NOVELS

大藪春彦
名のない男

発行者　徳間康快
発行所　徳間書店
東京都港区新橋四の一〇　郵便番号一〇五-五五
電話三四三三・六二三二　振替東京四-四四三九二

©Haruhiko Ōyabu 1992
落丁・乱丁はおとりかえいたします

Printed in Japan　〈編集担当　高田暁郎〉

ISBN4-19-154989-8

傑作ハードアクション

名のない男

大藪春彦

徳間書店

TOKUMA NOVELS

H82173

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

名のない男／目次

剝かれた街……9
目撃者を消せ……30
平和会議……46
消えた囮（おとり）……62
被害者を捜せ……79
虹色のダイア……96

汚れた海……112
裏切り埠頭……129
鼠掃除……148
敗北……167
燃える覆面車……186
誘拐……206

本文挿画・武田英希

剝かれた街

1

ちょっとした事件にかかわりあっていたので、私が暴力団関係を専門に取扱う、警視庁捜査四課の第二班主任室に顔を出したのは、一週間ぶりのことであった。

私は警察官ではあるが、いわゆる覆面刑事、つまり秘密捜査官という身分だ。

だから、主任の部屋に入るときでも、新聞記者のように振舞わなければならなかった。ときには、連行された容疑者の役もやらなければならない。もう少しギャラが高くないと引合わない話だ。

私の本当の身分を知っているのは、警視庁でも限られた一握りの首脳部と、四課の暴力団係の同僚の一部だけだ。

だから私の左の脇腹には、いまでも、本当の私を知らない警官から射たれた弾傷の跡が残っている。

天井の扇風機が生ぬるい空気を掻きまぜている主任室で、私は報告を終わった。ヤケに喉が渇くので番茶を啜るのだが、それが、そのまま汗になっていくようだ。

気のない生返事をしながら私の報告を聞いていた主任の遠藤警部は、しゃべり疲れた私がタバコに火をつけると、

「御苦労だったな。その事件はこれで打ち切りだ。実は君に、新しい仕事をやってもらわなければならん事になったんでね」

と猫撫で声で言った。

「この暑いのに、そう馬車馬のように扱わないでくださいよ。ある美人と、今週は上高地のロッジにし

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

けこむ予定になってるんですからね」
私は冗談を言った。
主任は真面目な表情を崩さずに、
「デートは取消しだ。今度の仕事で、また新しい女が出来るかもわからんから、そうガッカリするなよ」
と、言った。
「何をやったらいいんです？」
私は溜息をついた。
「最近、米軍基地内の兵器庫が次々に破られて、拳銃や実包が盗まれている。四日ほど前には、朝霞のキャンプ・ドレーク、昨日は所沢のジョンソン基地がやられた。盗まれた数量はいまのところ大したことはないがね」
主任は思わせぶりに言葉をとめた。
「そういえば、新聞にものってましたね。基地の空軍憲兵隊と特別犯罪調査局と地元の日本警察が合同で捜査してるって……」
私は呟いた。
「そのとおりだ。盗まれたものは仕方ないが、問題はそれがどう使われるかだ。君も知ってのとおり、いまは麻薬の需要供給のバランスが崩れて、供給量が極端に不足している。末端の中毒者に渡るときの値はインフレ相場を呈している。横浜での騒ぎがいい見本だ。ブドウ糖を何倍にも混ぜたものでも引っぱりダコになっている」
「……」
「と、いうことは、売り手から見れば、現物さえあれば大稼ぎが出来るというわけだ。だから、暴力団同士で、拳銃に物を言わせてでも、相手から現物を捲きあげようと隙を狙ってるわけだ」
主任は扇子でデスクを叩いた。
「それだけ聞けば充分です。それで、私はどこに行けばいいんです？」
私は言ってタバコを揉み消した。
主任は立上がり、背後の壁にかかっている地図に

向かった。今年中に犯罪の行なわれた地点にはピンが刺されている。
「東京周辺の米軍の基地は、北多摩からそれに接した南埼玉にかけて集中した立川グループと――」
主任は、立川、砂川、福生、朝霞、新座、所沢などを竹棒で示し、それから、
「それと、厚木、座間などといった厚木グループの二つに分けられることは知ってるだろう？　それに、平塚、戸塚、横須賀などの海軍が加わって日本を防衛している気だ。余談だが、これらの基地は立派な道路によって連結されている。国民はお芽出たいから、オリンピック道路だなんて言われて悦に入っているが、事実は歴然たる軍用道路さ」
と、唇を歪めた。
「それで？」
「今度のケースを見ると、拳銃が盗まれているのは立川グループの基地だ。だとすると、地理的に一番近い新宿の連中の仕業かも知れない。しかし、横浜の連中がわざと横須賀や厚木を避けて、遠征してきているということも考えられる。そこで私は神奈川県警に問い合わせてみた」
「カンは当たりましたか？」
「さあ、どうだかな？　だけど一つだけ収穫はあった。横浜の山手に勢力を張ってきた山手会の中堅幹部の村岸が、ここひと月ほど姿を隠していると報告してきた。この男だ……」
主任はデスクの上に一枚の写真を投げだした。
手札判の印画紙のなかで、三十二、三歳の整った顔の男が、沈んだ目つきをしていた。眼鏡をかけてはいないが、どことなく知性的な表情をしていて、少しもヤクザ臭くない。
「前科はない。人の一人や二人は殺したことがあると睨んでるんだが、うまく立廻ってボロを出さないんだ。趣味もなかなか渋いらしい」
だるそうな主任の声が耳に入ってきた。

2

その日の夕方、私は目立たぬ外観の茶色のブルーバードを運転して、立川を抜け、福生に向かっていた。

夕方の五時だというのに、八月の陽は高く、アスファルトの強烈な照り返しは、サン・グラスをかけていても目眩いような気がする。交差点の赤信号でとまるごとに、車窓から吹きこんでくる熱気で汗が吹きだしてくる。

それでも私は、かたくなにクリーム色の上着を脱がなかった。その下には拳銃を吊っているからだ。助手席に置いたソフト帽のなかには、細身の軽いナイフが隠されている。

六十二年型のその車は、ある陰惨な犯罪に使われて没収され、競売に出されたが買い手がつかなかったのを、警視庁が安く手に入れたものだ。しかし、ほとんど私専用と言ってもよく、それに私が機会あるごとにスピード・ショップに持ちこんで機関部を改造してあるから、加速のよさは抜群だ。百二十馬力にチューン・アップしたエンジンとクロース・レイシオの五速ギアの組合わせで、発進から百キロに達するまで十秒を切る。

昭島を過ぎ、拝島で車は国道十六号に出た。二級国道百二十九号が昇格したのだ。道行く車の数は数えるほどになった。

拝島の外れで青梅線の踏切りを渡ったところから途端に素晴らしい舗装だ。車輪を伝わってくるコンクリートの感じから、戦車が通れるように造ってあることがわかる。日米行政道路なのだ。

道はト型に分かれ、右側は砂川に通じている。私は直進し、車のスピードを上げていった。このあたりから看板はほとんど英語だ。

すぐに右手に横田基地が見えてきた。白い鉄柵に白い金網を張り、立入禁止の札をぶらさげた広大な

基地が。日本人ガードが拳銃を吊った一番手前のナンバー3ゲートあたりは、道路をはさんで兵隊と家族向けの店が並んでいる。自転車に乗った娘やショート・パンツの女が原色を振りまき、駐留軍ナンバーの車が行き交う。

次のゲートは#3だ。基地の柵には目かくしが続き、道をへだてた左側は官舎だ。

最後のゲートがナンバー1だ。左手にはジャパマ・ハイツと水耕農場、右手の基地は倉庫の並びに続いて、見渡すかぎりグリーンのヤケに広い飛行場だ。戦闘機から重爆にいたるジェット機が金属音と連続する砲声のような轟音と地響きをたてて、ほとんど二、三分置きに発着する。

柵の横ではダンプ・カーのアンチャンや修学旅行のバスまでがとまって、生々しい緊張感を伝える光景に見とれている。

私はこの行政道路を幾度となく往復して、建物の配置をよく頭に叩きこんだ。

第三ゲートのそばを車を走らせているとき、道の脇でオンリーか洋パン風の女が三人、海水着に近い格好で立話をしているのに目をとめた。

私は彼女等の脇をすれすれに車をかすめさせた。

「何すんのさ！」

「目が眩んだのかよ？」

女たちは野卑な罵声をあげた。

私は急ブレーキをかけて車をとめると、乱暴にバックさせた。

女たちは強がりを言っていても、怯えた表情を見せた。

「済まなかったな……ちょっと尋ねたいんだが、このあたりで一番面白く遊べる店はどこだろうな？」

私は愚問を発した。

女たちは、ホッと体の力を抜いたようだ。顔を見あわせていたが、右端の黄色いショート・パンツに腹を露出させたブラウスの女が、

「そうね。クラブ〝サヨナラ〟なんかどうかしら？

面白いかどうかわかんないけど、ここでは一番高級だわね」
「どこにあるんだい？」
「あんた、この町ははじめてね？」
「そうなんだよ。案内役が欲しいところだ」
私は言った。実は、二年ほど前に一週間ほど滞在したことがある。
「〝サヨナラ〟は、そうね、東福生と福生の中間ぐらいにあるわ。もとは将校クラブだったんですけど、今は日本人も入れるのよ。そこで、あたしの妹分の千津子が働いてるから、寄るようなことがあったら、呼んでやってね。ミッチーから聞いたといえばわかるわ」
女は言った。
礼を言って、私は車を走らせた。あまり広いとも言えぬ福生の町を丹念に見て廻って、二年前の記憶を呼び起こしてから、クラブ『サヨナラ』に入った。午後の八時であった。

多摩川と道をはさんで建つそのクラブは、以前私が覗いたときには、『ハッピー・ホテル』という名前であった。数千坪の庭園のなかに、クラブ自体とホテルが同居していて、金曜の夜の給料日から日曜にかけては、空軍将校たちが乱痴気騒ぎをやっていたものだ。
ネオンを蔓バラで飾ったアーチをくぐると、そこが駐車場になっていた。EやFナンバーの車にまじって日本ナンバーの車もかなり見受けられるのは時代が変わったせいか。
私は駐車場に、見すぼらしい外観のブルーバードをとめた。もっとも、アメリカ人は車の外装にかまわないから、キャデラックにしても、ぶっつけた傷をそのまま放ったらかしにしている。
駐車場から芝生を五十メーターほど歩いたところに、クラブの建物がある。左手の林のなかに頭を覗かせているのがホテルだ。
ボーイに迎えられてクラブに入ると、内部は極端

に薄暗かった。三十ほどあるテーブルにはランプを模した豆電灯が淡い光を放ち、それが客の額とグラスや皿だけを鈍く照らしている。

ステージでは、わずかにスキャンティでおおった局部を誇らしげに突きだして電気マッサージ機のように腰を振る混血女の股のあいだを黒人がかいくぐるリンボー・ダンスのショーをやっていた。

私は隅のカウンターに腰をおろし、キャナディアン・ウィスキーの水割りを注文して、まわりをさり気なく見廻してみた。

客は黒人をまじえた米人が三分の二、残りが東洋人といったところだ。彼等の相手をしているのは同伴の女とホステスが半々のように見えた。

目ざす村岸の姿は見当たらない。しかし、遠藤主任から高級な雰囲気を好む村岸の趣味を聞いている私は、彼がこの店に姿を現わすであろうことを直感していた。

3

カウンターで水割りを五杯空にしたが、村岸は姿を見せなかった。バーテンにカマをかけてみようとも思ったが、あわててもマズい結果になるから、ダイスを転がしたりショーを眺めたりして時間を潰した。

そのうちに、ちょっとしたことに気付いた。カウンターと従業員の出入口のあいだに、分厚いカーテンで仕切られた戸口があり、そこに入っていった客は、アルコールよりもっと強烈なものに酔ったような様子で戻ってくるのだ。

私はトイレに立つふりをして、そのカーテンをくぐった。途端に目の前に、ボーイの制服を着ているがヤケに図体の大きな男が二人立ちふさがっていた。彼等の肩越しに地下に通じる階段が見える。

「どちらにいらっしゃるおつもりで？」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com